

特別支援学校における地域資源を活用した 授業の有効性に関する検討[†] ～教師と生徒へのインタビュー調査から～

本多 由香*・武田 篤**

秋田県立大曲支援学校*・秋田大学教育文化学部**

共生社会の実現に向け、地域コミュニティの中で児童生徒を育てることが強く求められている。秋田県内の特別支援学校でも、地域との関わりを重視した教育活動を行う学校が増加してきている。本研究では、特別支援学校において地域資源を活用した授業を担当している教師とそれを受けている生徒双方を対象に、その授業をどのように受けとめ、感じているかについて調査した。その結果、地域資源を活用した授業の有効性として、生徒の学習意欲や自己有用感の高まりが挙げられた。地域資源を活用した授業では、スケジュール調整や準備の大変さなどの課題もあるが、社会性の基盤となる自己有用感の育成に視点をあてた授業づくりを行っていくことの大切さが再確認された。

キーワード：特別支援学校，地域資源，授業実践

I はじめに

共生社会の実現に向け、障害のある児童生徒が、地域社会の活動に積極的に参加し、豊かに生きていけるようにするため、地域の人たちとの交流を通して、相互の理解を深めていくことが求められている。平成24年7月に文部科学省初等中等教育分科会に設置された特別支援教育の在り方に関する特別委員会は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」を発表した（文部科学省，2012）。この中で特別支援教育は、「共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものである」とされた。特別支援教育の推進のための重要

な柱の一つとしては、「地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることができるよう、地域の同世代の子どもや人々の交流等を通して、地域での生活基盤を形成する」ために、可能な限り共に学ぶことができるよう配慮することが挙げられている。これまでも地域の小・中学校との交流及び共同学習は、学校間交流や居住地校交流を基盤に、各校、工夫を凝らして取り組んできており、その重要性はますます高まっている（国立特別支援教育総合研究所，2018）。その成果として、「回数を重ねることで、共感性の芽生えなど双方の子ども同士の関わり方に変化が見られてきた」（国立特別支援教育総合研究所，2015）といった、双方にとってのメリットが明らかとなってきている。

一方、学校と保護者や地域住民が共に知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子どもたちの豊かな成長を支える「地域とともにある学校づくり」を進めるコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の設置校は年々増加してきている（文部科学省，2018）。コ

2019年1月7日受理

[†]Yuka HONDA* and Atsushi TAKEDA**, A Study on the Effectiveness of Classes Utilizing Regional Resources at Special Support School; From an Interview Survey to Teachers and Students

*Akita Prefectural Omagari Support school

**Faculty of Education and Human Studies, Akita University

コミュニティ・スクールは広く保護者や地域住民が参画できる仕組みであり、「当事者として、子どもの教育に対する課題や目標を共有することで、学校を支援する取組が充実するとともに、関わる全ての人に様々な魅力が広がる」（文部科学省、2016）とされている。地域の中で子どもを育てることの意義に加え、関わる全ての人にとって魅力ある取組として期待されていることもあり、コミュニティ・スクールの平成30年度における全国的な校種別設置状況を見ると、高等学校では前年比15.3倍、次いで特別支援学校が前年度比9.6倍と高い伸びをみせている（文部科学省、2018）。このように小・中学校だけでなく、高等学校や特別支援学校においても、学校や保護者が地域と共に歩む意義が認識され、社会全体に広がりつつあることが分かる。

このような中で、秋田県内の多くの特別支援学校でも、ここ数年、地域との関わりを重視し、地域資源を授業に積極的に活用する取組が進んできている。しかし、その内容は単発のものから継続のものまで様々で、試行錯誤しながら実践している学校が多く、その成果等はまだまだ十分に検討されてきていないのが現状である。そこで本研究では、特別支援学校において地域資源を活用した授業の有効性と今後の方向性について検討することとした。

II 対象と方法

1 調査対象と方法

平成29年度に地域資源を活用した授業を担当したA支援学校高等部の教師24名と地域資源を活用した生活単元学習に参加したA支援学校高等部1年10名を対象とした。教師へは地域資源を授業に活用した場合と活用しない場合の違いと課題について、自由記述によるアンケート調査を平成29年12月に実施した。また生徒へは、同じく12月に自由発話によるインタビュー調査を実施した。アンケートの記述内容やインタビューの発言内容はKJ法に準じてカテゴリー化し、分析した。

2 対象校の地域資源を活用した授業の概要

知的障害特別支援学校のA支援学校では、「瞳かがやき、笑顔あふれる学校」を目指す学校像として掲げ、地域とのつながりを大切にしながら、地域に根ざした教育活動を通して、児童生徒の積極的な社会参加と職業自立を目指してきている。開校当初か

ら地域の多くの支援団体、事業所等に支えられ、校内外での交流活動を教育活動の中心に据えてきた。近年は、クリーンアップや清掃活動、除雪等、地域での貢献活動を継続して行っている。またここ数年は、「地域が教室」を学校運営の重点にして、特色ある教育活動を実践している。中でも高等部では、「地域行事に参加」から「地域の一員として参画へ」として各学年がそれぞれの特徴を生かし、地域資源を活用した生活単元学習を展開している。たとえば、平成29年度には、高等部では、1年生がよさこい踊りの発表を通して地域や他の支援学校と交流し、2年生では老人福祉施設や保育所などを訪れ、お楽しみ会や演劇発表を、3年生では地域の行事に参加し、太鼓演奏などを行った。どの学年も、年間を通して地域と関わる活動を授業に取り入れている。

本研究でインタビュー調査の対象とした1年生では、授業に生徒の希望を取り入れ「よさこい踊り」の活動を中心に据えて行った。練習を重ねる中で、他学部で発表する機会を設けてもらったり、技術の向上を目指して地域のよさこいチームから演舞指導を受けたりした。また、地域の花火大会に関連した祭り（8月）やグループホームでの発表（9月）、地区の祭り（10月）、ショッピングセンターでの発表（11月）等への参加は、希望者を募り、保護者の送迎が可能な生徒が参加して披露した。さらに12月には他の特別支援学校を訪問し、よさこい踊りの披露や踊りのワンポイントアドバイス等、生徒が自分たちが企画準備して交流会を行った。

III 結果

III-1 教師へのアンケート調査について

教師へのアンケートは24名中21名（88%）から回収した。ラベルカードは全部で70枚となった。内容は、大きく地域資源を活用した授業の「違い」と「課題」の2つに分類された（表1）。

1 違い

1-a) 意欲向上

この項目で最も多かったものは学習意欲に関してで、「期待感をもって授業を受けている」「授業への食いつきが違う」「モチベーションがとても高い」「授業に引き込まれる」「よいものを作り上げようとする意欲が高まってきた」など地域資源を活用することで生徒の学習に対する意欲が増大することが挙げられた。次に「感謝されたり喜

表1 地域資源を授業へ活用した授業について

対象者21名 n=70

1 違い	
a) 意欲の向上 (38枚)	学習意欲 (17枚) 自己有用感・自己肯定感 (9) コミュニケーション力 (7) 緊張感 (4) 卒業後の生き方 (1)
b) 本物の体験 と深い学び (14)	本物の体験 (7) 学び合いによる深い学び (4) 故郷への思い・誇り (2) 視野の広がり (1)
c) 授業改善 (12)	生徒の印象に残る授業 (3) 個の伸長 (3) 教師の緊張感 (2) 指導力の向上 (1) 多角的な評価 (1) 視野の広がり (1) 学校の理解啓発 (1)
2 課題 (6)	
	地域からのアプローチ (1) 準備に手間 (1) やりっぱなし (1) 互いのスケジュール調整 (1) 事前の十分な計画 (1) たくさんやるだけでは (1)

ばれたりすることで自信になっている」「達成感が高まっている」といった生徒の自己有用感や自己肯定感の向上につながっていることが挙げられた。他には、地域に出かけ「いろいろな人と会うことでコミュニケーションの力がアップする」「生徒と地域住民が互いに理解し合える機会となる」「授業への地域活用を継続することで、深い関わりが生まれている」等の意見が挙げられた。

1-b) 本物の体験と深い学び

この項目では「本物に触れることができる」「実際に体験できる」「プロの演技や気迫を間近に感じる」等、外部講師を活用することで本物の体験ができることが挙げられた。また、「学びが多く、繰り返すことで、自分たちで考えるようになる」「よりよくするために話し合い、意見を話す力や聞く力が高まる」といった学びの深まりが挙げられた。

1-c) 授業改善

この項目では「生徒の印象に残る授業になる」「地域の方の指導を取り入れると生徒への伝わり方が違う」等、授業改善に関する意見が挙げられた。また、「本物の体験を授業に取り入れることで技術面での成長が見られる」「生徒のいろいろな面が引き出せる」など、生徒一人ひとりの伸長に関する意見が挙げられた。他に、教師にとっては、学校外の人たちと一緒に授業をつくることで「緊張感が高まる」ことや「多角的な評価を受ける」こと、さらに「視野が広がる」ことなどが挙げられた。

2 課題

地域資源を授業に活用するにあたっての課題としては、「地域とつながるパイプが多い方がいいので、地域からのアプローチもあればよい」といった地域の資源開拓に関することも今後の充実策の一つとして挙げられた。また、「準備に手間がかかる」「相手がある活動は、互いのスケジュール調整が必要」、「十分な計画が大切」であることなどが指摘された。他に、「有効なものを精選して深めることが大切で、たくさんやればよいものではない」などの意見も挙げられた。

III-2 生徒へのインタビュー調査について

生徒へは平成29年12月に、5名ずつの2グループ分け、自由発話によるインタビュー調査を実施した。ラベルカードは全部で47枚となり、内容は、大きく「プラス感情」と「マイナス感情」、「その他」に分類された(表2)。

1 プラス感情

1-a) 意欲

地域に出かけて学習することについて、生徒の感想で最も多かったのは「意欲」であった。地域に出かけて発表したり、イベントに参加したりすることで「やる気が出る」「緊張するけど出かけた」といった発言があった。また、販売活動や演舞披露の際にはたくさんの人に来てほしいと考えており「お客さんが少ないので、大きな声で呼びかけるといいと思う」「販売の時はただ売らなくて、使い方を紹介すればいいのではないか」と考えている生徒がいた。

表2 地域に出て学習することについて
対象者10名 n = 47

1 プラス感情	
a) 意欲 (11枚)	やる気が出る (5枚) 緊張するけど出かけた (2) 頑張っって販売活動をした (2) お客さんと呼び込む方法を 考えたい (1) ただ販売するだけでなく使い方も 教えたい (1)
b) 楽しい・うれ しい (10)	楽しい (5) 相手が盛り上がったり楽しんで くれたりすると嬉しくなる (4) 知っている人がいるともっと 楽しい (1)
c) 経験の拡大 (4)	いろいろな経験をした した方がいい (4)
2 マイナス感情	
a) 緊張や不安 (7)	緊張する (5) 初めての所は不安で嫌だ (2)
b) やる気の低 下 (6)	自分のやることやることがない とやる気がでない (2) 面倒くさい (1) 恥ずかしい (1) 目立ちたくない (1) 行きたくない (1)
3 その他 (9)	
	友達と一緒にできる (5) 中学校や中学部でも地域に出かけて いたので慣れている (3) 土日の発表会は参加者が少ないけど 本当はみんなで行きたい (1)

1-b) 楽しい・うれしい

次に多かったのが「楽しい、うれしい」であった。多くの生徒が地域に出て活動することを「楽しい」と感じており、「自分たちの発表を見ている地域の方が盛り上がっているのを見ると楽しくなる」「楽しんでくれるとうれしい」と話す生徒もいた。

1-c) 経験の拡大

「経験が広がる」と捉えている生徒が多くいた。「いろいろな経験をしたい」と思ったり、「いろいろな経験をした方がいい」との考えをもったりしていた。

2 マイナス感情

2-a) 緊張や不安

一方で、地域に出かけて学習することに不安な感情を抱いている生徒も少なくないことが明らかとなった。中でも多かったのが「緊張する」で、他に「初めての所は不安で嫌だ」と述べた生徒もいた。

2-b) やる気の低下

マイナスの感情の中で次に多かったのがやる気の低下であった。「自分のやることやることがない」とやる気が出ない」「面倒くさい」と発言する生徒や「恥ずかしい」「目立ちたくない」と話す生徒もいた。

3 その他

半数の生徒が「友達と一緒にできる」と話し、一人だけでは嫌だが、仲間と一緒にだと参加しやすいことを挙げていた。また、これまで中学校や中学部時代に地域に出てきた経験から、地域で活動することに「慣れている」と述べる生徒もいた。

IV 考察

今回、地域資源を活用した授業について、指導にあっている教師とそれを受けている生徒双方に、その授業をどのように受けとめ、感じているかについて調査した。その結果、教師は地域資源を活用した授業について、事前の準備や互いのスケジュール調整等に手間がかかるものの、生徒の学習意欲がとも向上すること、さらに地域の人たちと積極的に関わるなかで自信や自己有用感を高めていっていると評価していることが明らかとなった。

特別支援学校高等部生徒の中には、小・中学校時代、通常の学校で学んできたものも少なくない。これらの生徒の中には、小・中学校で学んだ際に、その力を十分発揮できず、結果として自信や自己肯定感を低下させて特別支援学校に進学してくるものもいる。したがって、特別支援学校では、生徒の自信や自己肯定感をいかに回復させ育成していくかということが大きな課題となっている。このような中で地域資源を活用した授業は、地域の様々な人たちと関わり、共に活動することで生徒のコミュニケーション能力を高めてくれるとともに、自分も「人の

役に立った」「人から喜んでもらえた」という経験を積み重ねることで自信や自己有用感を育む絶好の機会や場を提供してくれていた。国立教育政策研究所(2015)は、社会性の基礎となる「自己有用感」について、「人の役に立った、人から感謝された、人から認められたという自己有用感」は、自分と他者(集団や社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」だとしている。今回の調査で、多くの教師が地域資源を活用した授業では、生徒の自信や自己有用感の向上をあげていたが、これはまさしく生徒が地域の様々な人たちと実際に活動を共にし、関わり合うなかで人から認められ、そして自分も人の役に立つ存在であることを実感したからと言えよう。したがって、地域資源を活用した授業は、生徒に様々な人たちとの出会いや交流の機会を提供するだけでなく、活動を共にすることで自己有用感を育ていく貴重な機会を提供してくれると捉えることができる。認められ、活躍する場や機会がなければ自己有用感を育むことは難しいことから、地域資源を活用した授業には校内の限られた集団や活動を拡大し、補う役割を期待することができる。

また地域資源を活用した授業について、多くの教師が、生徒たちの学習意欲の向上をあげていた。これは地域資源を活用した授業が、生徒にとり具体的に、体験的な活動であることが大きな要因と考えられるが、同時に地域の様々な人たちと関わる中で、自分たちの活動や努力を褒められたり認められたりすることで、自分も誰かの役に立つ存在として自己有用感を刺激され、高めていくこととも深く結びついていると思われる。自分が人の役に立ったり、認められたりと感じる授業だからこそ、生徒たちは授業に積極的に、そして意欲的に参加していくといえよう。

一方、生徒たち自身も地域に出て行く授業に対して、緊張もするが、楽しく、やる気が出ると述べるなど、肯定的に捉えていることが明らかとなった。たとえば、物品販売の際には「単に売るだけでなく使い方も教えない」とか、また発表会では「相手を楽しんでくれたり盛り上がってくれたりするとうれしい」と話し、逆に、「自分のやることやることがないとやる気がでない」と述べていた。他から認められる経験の積み重ねや緊張感からの成功体験こそが、「他者との接触が新しい自分を引き出し、

それが自分の可能性を感じさせ、自分への挑戦/「やる気」を生み出す」(金子, 2008)のである。このように、生徒が地域を活用した授業を楽しく感じ、そして意欲的に取り組む背景には、生徒たちの「自分も誰かのために何かをしてあげたい、助けたい」という思いが根底にあるからといえよう。トマセロ(2013)は、ヒトは利他性を生得的に持ち、その後、成長とともに社会的環境の中で調整されていくことを指摘している。特別支援学校で学ぶ生徒たちは、ともすれば周囲から支援を受けるだけの人たちと思われがちだが、実際は、人の役に立ちたい、人を手助けしてあげたいという思いをととも強く抱いている。彼らが本来もっている利他心をどのように育てていくかは、まさしく彼らの自己有用感をいかにして育てていくかということと重なる。地域資源を活用した授業は、人との関係や社会経験を拡大するだけでなく、地域の人たちとの交流や活動を通して、褒められたり、感謝されたりする中で、生徒の自己有用感を育む絶好の機会を提供してくれているといえる。

以上今回の調査から、地域資源を活用した授業は、生徒の社会性の基盤にある自己有用感を育てるためのとても有効な側面を有しており、この視点をもって授業づくりを進めて行くことの大切さを再確認できた。

秋田県内の特別支援学校は、開校以来、地域とのつながりを大切にし、地域の方々を学校の応援団とする関係づくりに力を注いできた。高橋(1991)は「地域に根ざした学校づくりに必要なのは、地域の人々が正しい理解のもとに子どもたちの発達に力をかしてくれる状況をつくり出すこと」としている。今後は、地域に根ざした教育活動の中で、生徒の自己有用感を育てるための地域資源活用について、具体的にどのような方策や留意点が求められるか、授業実践を積み重ねながら明らかにしていきたい。

付 記

本研究の一部は、日本特殊教育学会第56回大会(大阪)において発表した。

文 献

金子 奨(2008): 学びをつむぐ -〈協働が〉育む教室の絆. 大月書店
 国立教育政策研究所(2015): 「自尊感情」? それ

- とも「自己有用感」？
<https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>（参照2018/12/18）
- 国立特別支援教育総合研究所（2015）：インクルーシブ教育システム構築に向けた取組を支える体制づくりに関する実際的な研究－モデル事業等における学校や地域等の実践を通じて－（平成25～26年度）研究成果報告書
<http://www.nise.go.jp/cms/7,10802,32,142.html>（参照2018/12/26）
- 国立特別支援教育総合研究所（2018）：地域実践研究 交流及び共同学習の推進に関する研究（平成28～29年度）研究成果報告書
<http://www.nise.go.jp/cms/resources/content/7412/20180628-115348.pdf>（参照2018/12/26）
- 文部科学省（2012）：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm（参照2018/12/28）
- 文部科学省（2016）：「学校運営協議会」設置の手引き コミュニティー・スクールって何?!～魅力からつくり方まで、教えます～
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/school/detail/1361007.htm（参照2018/12/28）
- 文部科学省（2018）：コミュニティ・スクール2018～地域とともにある学校づくりを目指して～
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/school/detail/1311425.htm（参照2018/12/28）
- 高橋圭史（1991）：たくましく生きぬく力を育てるために－鷹栖養護学校の実践に学んで－. 情緒障害教育研究紀要, 10, 121-128
- トマセロ, M（2013）：ヒトはなぜ協力するのか. 勁草書房（橋彌和秀訳）

Summary

To make the goal of a more inclusive society a reality, it is vital for young students to be raised in their local community. Even among special-needs schools in Akita Prefecture, a growing number of schools are conducting educational activities that emphasize community involvement. In this study, we examined the reactions and feelings of both teachers and students at special-needs schools to lessons that made use of local resources. Our results showed that students' motivation to learn and their sense of self-efficacy were effectively increased through these lessons. While lessons utilizing local resources involve difficulties with scheduling and preparation, our results reconfirmed the importance of developing activities with an aim to cultivate self-efficacy, which the foundation of sociality.

Key Words : special support school, area resources, educational practice

(Received January 7, 2019)